

「神なき時代の聖化の神学」

- 生活世界の神学へ -

東方 敬信

マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、キリスト教信仰と経済生活の微妙な絡み合いを論じたもので有名である。それに対して、イギリスの経済史家リチャード・ヘンリー・トーニーは、ヴェーバー仮説を批判しながら、16世紀にはじまった複雑な生活に対処する実践的なガイドラインを宗教は提供しなかったと嘆いている。彼によると、教会の伝統的社会教説は、放棄されたのであり、「説教壇からのべられる社会学説がすてられたのは、それを全体としてみたばあい、棄てられるだけのことがあったればこそである。教会の社会教説が意味をもたなくなっていたのは、教会自身が思索をやめていたからであった。」¹これは強烈な批判である。

教会は、次第にしかし確実にその権威をおびやかす行動に直面していったのである。教会は、個人的な領域において権威を主張しながら、他方で社会的な価値観についてはその権威を失っていった。結果として、商取引と組織化された社会の諸関係では、霊的な意義は暗黙のうちに否定されていくようになった。王政復古や名誉革命のときには、もう教会の社会教説を吟味するような習慣さえなくなっていた。「一八世紀になると、社会倫理について英国教会の教説を吟味するなどということは、ほとんど無駄なことになってきた。というのは、そのときの教会の教説は何ら目新しい寄与もはたすこと

¹ トーニー 『宗教と資本主義の興隆』（岩波文庫、下78頁）

なく、少数の偏狭な人間にうけいれられていたほかは、棄てられてしまっていたからである。」² 教会が思索をやめてしまい、自らの哲学をもたないときには、その時代の流行している社会哲学を受け入れてしまうものである。アイザック・ニュートンの活躍した時代には、数学や物理学にインスピレーションをあたえられた「政治算術」というものがもてはやされ、そしてジョン・ロックに関連した政治理論が影響力をもったのである。社会理論はすっかり変化し、社会は様々な職分をもった有機的共同体ではなく、また共通目的をもったものではなく、「株式会社」のように考えられはじめたのである。このことを我々は「社会の断片化」の始まりであり、現代社会にいたるまでの宗教の私事化と考えなければならない。

あらためて考えてみると、このような世俗化の波に洗われている現代社会において、人々に必要な精神性は、生活世界全体を包み込む霊的包括性である。別の言葉でいえば、コンスタンシー（志操堅固）という美德である。ジョン・ウェスレーの「完全」という語りかけも、ウィリアム・ローのそれも、上述した社会の断片化と宗教の私事化への抵抗運動という受け取り方ができるのである。つまり、生活世界全体をつつみこむ信仰生活が求められているのである。トーニーによると、「キリスト教とは独自の生活態度を意味するという考えを、無類の力強さをもって、再説したローのような顕著な例外もあり、『金銭の用途』に関するウェスレーの説教にあるような講義もありはしたけれども」と紹介されている。トーニーは資本主義の本質は世俗化にあるということになり、それに抵抗した運動がメソディズムということになる。

1、ウィリアム・ローとは誰であるか

ウィリアム・ロー（1686～1761年）は、名誉革命前の年、ノーサンブトニアのスタソフォード近くのキングズ・クリフに、乾物雑貨商トマス・ローの四男として生まれた。アン女王時代の1705年6月、ケンブリッジのエ

² 同上書、83頁

マニユエル学寮に給費生として入学したかれは、のち 1711 年に聖職になり、また同年に同学寮のフェロ - として選ばれた。

名誉革命当時幼少でその変革期の嵐をまぬかれ、いまやケンブリッジのフェローとして洋々たる人生の門出に立ったのであるが、このローの運命を大きく転回させたのは、1714 年 8 月のアンの急死とハノーヴァー王朝の成立であつた。当時は、王権神授説であつたので、王家を変えるというのは、神の戒めに背くぐらいのショックがあつた。

彼は、1715 年にハノーヴァー家への「臣従の誓」とステュアート家「放棄の誓い」を拒否して、フェロ - の地位と国教会内におけるあらゆる昇進の希望を捨てたのである。

私にとって非常に興味深いのは、1723 年、ローが、マンデヴィル (1670 頃 ~ 1733 年) の『蜂の寓話』において徳と悪徳との区別を抹殺したことを批判し文書をかいたことである。それは、アダム・スミスにいたる世俗化の波にあらがう抵抗の意味があるのである。さらに 26 年には、キリスト教的生活様式に関するかれの最初の実践倫理的著作『キリスト者の完全』を出版した。つづいてローは、家庭教師と霊的指導者となった。このギボン邸の時代に「献身的で聖なる生活への真剣な招き³」を記しているのである。

1731 年、ローは、理神論者ティンダル (1655 ~ 1733 年) が前年に出版した『天地創造と同じく古きキリスト教』の中で啓示を犠牲にして理性を高めたことを攻撃し、ティンダルの理神論を批判した。そして、近代主義者が「聖餐におけるキリストの實在」を否定して、聖餐を一片の象教、不在のキリストへの回想の中におこなわれるたんなる記念の儀式に引き下げているのに対して、ローは攻撃を加え、イギリス国教会の「キリストの實在」の教義を擁護したのである。

1736 年暮のギボン家当主の死後、ローは、しばらく同家にとどまったが、40 年末頃故郷のキングズ・クリフに隠退し、61 年の死までの 20 年余を同地で送った。44 年からローは、ハチソソ夫人とギボン家の娘ヘスター・ギボ

³ William Law, *A Serious Call to a Devout and Holy Life*, (Grand Rapids: Eedmanns, 1966)

ンとの三人で、かれの実践倫理的著作『キリスト者の完全』と『真剣な招き』中の「規則」と「方法」とを文字通り実践した、祈りと禁欲、慈善の生活をはじめた。

このように晩年の約 20 年間に慈善事業にささげたロ - は、かれが創立した慈善学校の会計検査にたずさわった 1761 年の復活祭に病をえて、4 月 9 日朝、73 歳で魂を召された。その長い生渡を通じて臣従拒著者の立場を固守したローであったが、同じく拒著者でありながら教区教会の礼拝出席を続けたのである。彼はまたその墓地に葬られた。それは、「聖者らしさ」ともいべき性格の独特の美を特徴としたローにふさわしく静穏な終焉であった。

2、霊的包括性への招き

ウェスレーはクリスチャン・パーフェクションを語るのに、「段階」という不幸な言語を使ってしまった。彼の説教の「救済の聖書的方法」は、義認と聖化の段階を次のように列挙する。(1) 先行の恵みの働き (2) 義認より先に起きる悔い改め (3) 義認あるいは赦し (4) 新生 (5) 義認と聖化の漸進的な働きの後の悔い改め (6) 完全な聖化である。⁴

彼の提案の欠点は、それがあまりにも規則的であることである。なぜなら、ウェスレーは、我々の生活がこのような極端な正確さで並ぶことはないというからである。つまり段階は、それぞれに重複するし、我々は後退することもあるのである。しかし、ウェスレーが「完全」という言葉によって主張したことは、大切にしたい。もし完全が「人間の生活全体に恵みが満ち溢れること」を意味するなら、段階と言うより、もっと豊かに考える必要があるからである。つまり、我々が想像力豊かに霊の旅路(スピリチュアル・ジャーニー)に参加するように招かれる生活の実際の描写が必要だからである。キリスト者が旅立つように招かれる旅路を映し出す必要がある。キリスト者の目的地への生活は、旅路に着手する前に明らかにされる到着地ではない。

⁴ 青学キリスト教文化研究センター『ウェスレーと教育』(ヨルダン社)参照。

しかし、それよりもむしろ、我々はそれを追い求めるために必要な手段によってもっとゆっくりと変革されて終末の本質についても学ぶのである。それで、正確に終わりを認知する唯一の手段は、途上にある人たちの生活に注目することによってである。

我々の注意をウェスレーのよく知られている聖化とキリスト者の完全に向けるなら、さらにその信仰の旅路にヒントを与えたウィリアム・ローの「献身的な聖なる生活への真剣な招き」を考えなければならない。ウェスレーは、ローのいわゆる神秘主義とも違い、贖罪論が明確にあるが、ローの「キリスト者の完全」の見方によって影響を与えられたことは否定できない。私がこれから論じることは、ウェスレーをもちろん批判することではなく、ローとウェスレーの共通したヴィジョンを現代社会において実質化するためである。それでもなおかつ、私は、ウェスレーがローの「キャラクター研究」から学びそなったものあるいは表現を継承しそなったものを「献身的な聖なる生活」の重要なポイントを示唆したい。キャラクター研究は、単なるイラストレーションと違っている。イラストレーションと言うのは、分かっている理論に付け足して説明を加えることであるが、キャラクター研究と言うのは、それ事態が本質的な内容だからである。この線を追求することは、ローもウェスレーも手にしていた神の恵みを現代において受け留めなおす作業になる。もし我々がキリスト者であることについて証しをし、私たちが信じている信仰が真実であることを語るなら、この無神論的時代においてローとウェスレーの説明を示したいと思う。

3、ローの『献身的で神聖な生活への真剣な招き』の実践的意図

このローの書物全体の構造は、聖なる生活への道に歩むように読者が実践することを意図している。本書は、神への献身が、ある特定の宗教的義務だけでなく、重要なことであるが、我々の平凡な生活のすべての行動で現されるようにするように意図されている。キリスト者が「献身の時とその場所だけで厳格ではなく、教会の礼拝が終わってからもそうであるように」願われている。18世紀の世俗化の波の中で、特に彼らの時間と金の使い方が問

題になっている。なぜなら、そこではじまっている生活では、礼拝が終わったらもはや神のもとでは生きなくなり、次の祈りの時がくるまで、他の人々と同じ愚かな生を楽しみ、面白おかしく生きるということになり、そうであるなら信仰はただの冗談としてしか扱われなくなる。しかし、ローによれば、祈りがない聖なる生活はありえないし、また聖なる生活なしで神聖な祈りもない。もし自制心や謙虚さが、我々の救済の場つまり礼拝の場に欠くことができないなら、それらは我々の生活のあらゆる局面でされなくてはならないのではない。

ローにとって、問題は、献身の生活を望むが、肉体の弱さのために失敗するということではない。むしろ、聖なる生活に必要な意図と願いに欠けているからである。それである人は、「すべての人々が福音の完全について語らないであろう。したがって、あなたは自分の欠点に満足している。けれども、これは目的について何も言わないのです。なぜなら、問題は、福音の完全が達成されるかどうかではなく、誠実な意図と注意深い勤労と同じように、それを大切に思うかどうかです。完全を追求しないことは、反宗教的であるだけでなく反理性的な生活です。」⁵

こう言って、ローは、人々が世俗的な職業に関係しているために、少しでも神聖性から免除されると考えることを怠惰だとする。生活の状態を区別することはできない。聖なることは、すべて、牧師、実業家たち、女性たちによって同じく必要とされるのである。彼によれば、すべての人がこの世界を超えたところを見つめる存在であるから、それにふさわしい生活をすべきなのである。「これは唯一のどんな世界の仕事へも適応するはかりであって、いつでもどこでも、手によって心によって、時間によって、私たちの来世の注意深い準備として、ここから、日常生活から、行われなければならない。」⁶

この世の人は、直接霊的なことに関わっている人と同じように、彼の携わっていることに真実であり、正直であることを求められている。したがって、キリスト者の謙虚さについても、それが我々のすべての行動と願望に広

⁵ William Law, p.20

⁶ William Law, p.32

げられ「どこでも支配している習慣」にならなくてはならないのです。ローが観察するなら、我々は「あたかも、ある時は謙虚であり、ある時は誇っているという話をしている。服装が謙虚であっても、彼は学問を誇っていると、人柄は謙虚であるが、彼の容姿と身なりは誇っている」などと時々話をする。けれども、これが日常会話なのかもしれないけれども、厳密な真実によれば何も語っていないのである。我々が我々の行動の本質を調査するとき、それは許されない。支払いに不正行為をする人が非常に時間通りであることはありえない。それで皆は、彼が真の正直の原則によって生きていないと考える。外面的には、土地に誇りをもっている男が本当に謙虚な人と同じような姿で、人を気にしないということもありえないのである。キリスト者の完全は、従って、「いつでも同一の信仰によって生きるように」を我々の日常生活すべての行動に広げる試みである。従って、ローとウェスレーにとって決定的なことは、我々の行動が神にささげた生活と一貫しており意図の純粋と行動の特徴が一致していることである。ここで課題となっているのがどんな時間空間においても柔軟に一貫性を保っている人格の志操堅固である。

ローは、次に財産と富を所有することによって毎日の苦勞がない人たちに向って語る。彼らは、地位も名誉もあるのだから、より高い程度で神に献身していると考えられるはずである。彼らが謙遜や献身や正義と言うとき、たまの行為を行っているというのは不充分である。彼らは、究極的な力である愛の習慣によって生きなければならない。しかしながら、このような利点を持っている人たちは、彼らの精神が無邪気で合法的でありさえすれば良いと考え、自らの魂を殺している。

「休暇と引退よりすばらしいものはないのではないか。また、不精と怠惰ほど危険なものはないのではないか。家族の世話ぐらいで、称賛に値するのか！ どれほど多くの人々が現世的な満足によって満ち足り、宗教的欠陥を持っていることか。今、宗教が我々の心をおさめていないのは、無邪気で合法的でさえありさえすれば良いと考えて、宗教的内容に欠けているからである。それなりに合法的であるが軽率な生き方は、我々の良心に少しもめざ

めていない愚鈍なものになる。」⁷ さらに一般的な人々は、「宗教の真の感覚」から離れて、泥酔とお決まりの官能性と道楽によって遠ざかっていると指摘している。

それで、ローは、次のようにいう。誰でも1つ場面で空しさがあるなら、すべてのことにおいて空しさが満ちるのである。小さな虚栄心は、何事にも虚栄心が強いことを示すのである。彼は、このような問題が平凡であることを良く知っているが、それは事実なのである。「施しをするときに虚栄心が強く、服を着る時にも虚栄心が強いなら、宗教の場面だけで謙虚になること」は不可能である。こう言いながら、ローは、神への献身にしたがってすべての行動を構成することがすこしも堅苦しい生活になるとは考えない。そういう意見に反論をしている。それどころか、このような生活は、唯一の、そして本当に面白いものだということである。なぜなら、本当の信仰は、ただしく我々の情熱を正真正銘の善なるものに向けるからである。「羨望と野心は、彼らの果てしない欲望を持っている。そしてそれは人々の魂をかき乱し、飛ぶと同時に這い回るような矛盾した動きによって彼らを愚かにも惨めにする。」という。

4、祈りによって聖性を形成する

ウィリアム・ローやジョン・ウエスレーの聖化や完全の勧めは、禁欲のための聖なる生活ではない。そうではなくて、聖なる生活の拡大がいかに刺激的で魅力にとんだものであるかを示したいのである。現世的な願望によって必ず問題が生じると言って、キリスト者の生活が否定的な生になると挑戦をしているのではない。ローは、どちらかと言うと、説得的で魅力的な聖なる生活の描写したいのである。そして、ローが彼の書物の後半を記するのはそのためである。彼の論議は、それぞれの時間と結び付けられたそれに対応する美德があると言う。聖なる生活は、毎日の祈りの時を中心に形づくられるのである。もし我々が本当にこの世を越えたものを見つめる生活によって満

⁷ William Law, p.60, 61

たされると信じるなら、それは時間をかけて会得しなければならないと考える。なぜなら、それが喜ぶべき人生の冒険旅行だからである。

朝には朝の冒険の祈りがある。彼は次のように言う。「神が世界の中にあなた自身を誕生させ新しい喜びと新鮮な存在を与えたとき、朝があなたに新しい生命の初めであるように、あなたの最初の献身によって新しい創造について神を称賛し神に感謝しなければならない。そしてあなたは、身体と魂を提供しささげるべきである。あなたが持っているすべてを神の奉仕と栄光のために用いるべきである」。⁸

さらに、ローは、歌うことと祈ることを一つにしている。それは魂と身体を統一することを求めるからである。なぜなら、「魂が思想と情熱を持つのではなく、身体が思想と情熱をもつのである。身体が行動や運動を持つのではなく、行動が魂に影響を与えるのである。」といている。我々は身体だけでもないし魂だけでもないので、我々は自分の魂や身体の行動によって心の習慣を得るのである。したがって、我々が神への献身と喜びの習慣に到達するためには、魂の瞑想や実践だけではなく、内的な安らかさと結びついた外面の身体的実践が必要なのである。

9 時にローは、我々の祈りの主題が「謙虚さ」であると示唆している。彼は、謙虚さにどの美德よりも多く場所をとっている。「魂の謙虚な状態がまさに宗教の状態である」という。しかし我々が正確に謙虚さの本質を理解することは大切である。なぜなら、それは、単に自分を低くすることではないし、人と比べて遠慮することでもない。「謙虚さは、自分の弱さつまり罪についての本当のそして公正な感覚に土台を持っているのである。」⁹と言っている。謙虚さは、ローにとって、妥協と対立する魂の立場である。妥協とは、世界の気分ひたる姿勢である。世界は、キリスト者が拒絶しないわけにはいかない嫉妬や誇りや権力という誤った仮定の上に築かれているからである。ローがキリストの生活に特に十字架にアッピールするのは、この脈絡なのである。なぜなら、我々の聖なる主を十字架につけたのは世界の精神であった

⁸ William Law, p.155

⁹ William Law, p.199

からであり、それでキリストの霊を持っているすべての人は、世界に対立して、世界によってある仕方です苦しめられるに違いない。なぜなら、キリスト教はまだ、暗闇の王国が完全に終わるまで、キリストがされたのと同じ世界で生きているからである。これらの二つは、まったくの敵であるであろう。敵意の姿が隠れたということによって、世界をキリスト教的だと考えることは、ローによれば、世界をただいっそう危険な敵にするだけである。

そして、正午の祈りの主題は、「普遍的な愛」というものである。ローは、仕事に成功し、威厳のある人が日常の祈りの実践に参加すべきであると主張する。なぜなら、キリスト教の目的は、すべての人間的秩序をひとつの聖なる社会にすることだからである。金持ちも貧しい人も、高い地位のものも低いものもひとつになり、同じ信仰の霊によって、「ひとつの選ばれた民、特別な民、王的祭司、聖なる民になり、暗闇から輝く光に呼び出した神を賛美するのである。」¹⁰

彼が普遍的な愛を強調するのはこの文脈である。このような愛の説明は、妥協の余地のないものである。我々が、神が存在し、無限の愛を持ち、無限の知恵を用いる方であり、すべての幸福の源であると認識する時、はじめて神を認識している。そして、我々がこのような神のイメージにいけるなら、同じ仕方ですべての人々を見る義務と特権をもっているのである。もし、私たちに、優しく情熱的な愛があっても、このような愛の源泉がないなら普遍的な愛に欠けるのである。

ローは、3時の祈りも記しているが、最終的に、夕方の祈りにおいて、我々はすべての罪を告白しなければならないとする。なぜなら、さもなければ悔い改めない罪の罰が我々に襲いかかるからである。このような告白は、最も厳しい自己認識を必要とするのである。

このような毎日の祈りの議論において、ローは、もちろん神の普遍的な愛を土台にしている。ただこのような愛を土台にして、我々は、正確に我々自身をも愛することを学ぶのである。我々が、過去の行動をひどく嫌って、自己嫌悪に陥る時に我々は神の愛を無にしてしまうのである。正直に自分の

¹⁰ William Law, p.242

愚行を認めなくてはならないが、我々は、神が我々を愛したように、我々自身を正しく愛さなければならぬし、隣人をも愛さなければならぬ。我々は、まだそれで我々自身と他者を神のもとでの普遍的な友情を形成するために祈ることができる。キリスト者が「人間の友情で称賛されたすべてにまさる」相互愛の状態に育てられたのは、我々がそれで祈ることができるからである。

ローとウェスレーにとって、愛は決定的な、そして中心の美德である。神が愛するように、すべてを愛する愛である。そして、我々の罪の認識と悔い改めから生じる謙虚さをもつまで、その愛は、すべての行動をもたらしするためには十分ではないと言う。完全と呼ばれる生活を実現するのは、こういった信仰の賜物を必要としているのである。

このようなローの献身的な聖なる生活の分析は、ウェスレーの完全を説明するのに十分であるように思われる。しかし、さらに大切なものがある。それがキャラクター研究である。聖なる生活を構成する大切な信仰教育であり、それらが相互に関係を持つ方法の最終的な描写である。

5、ローのキャラクター

彼の「献身的な聖なる生活への真剣な招き」の大部分が、キャラクターの描写という大きな物語がある。名前を言うと、ペニテンス、カリデウス、セレナ、2人の忘れられない姉妹であるフラビアとミランダ、フルビウス、コーリア、フラタ、サッカス、オクタビアス、コグニタス、ネゴティウス、クラシクス、コメクス、パターヌス、マチルダ、ユーセビア、クラディウス、ウーラニウスという主人公たちがいる。彼らの名前だけでも興味深い。それらは特定のタイプを描こうとしたのである。これらの「タイプ」は、ローのキャラクターへの鋭い洞察力を現している。さらに、これらのキャラクターが生き生きと書かれているので、ローが読者を完全に引きつけた点で極めて重大である。

彼は、キリスト者の完全というのはそれに到達するために具体的な人物像がなければならぬと考えた。それは、私たち信仰者も具体的な人物とし

て信仰に生きているからである。私は、彼が行った方法を示ために少数の人物を取り上げたい。ローのキャラクターの多くが否定的に描かれている。

ローは、フラビアという女性を紹介している。彼女は、中ぐらいの富を管理しており、すべての友人たちから賞賛されている。彼女は、普通人の2倍の財産を持っているので、他の婦人たちより上品に生活できる。彼女は、常に着飾り、素晴らしいコーディネーションを楽しんでいる。彼女は、しばしば教会に出席して、聖餐を受け、信仰はきわめて正統的である。彼女は、自惚れと空しさについての説教を高く評価していた。それは、彼女が彼女より素晴らしいと思う「ルシナ」に向けられていると思っていたからである。彼女は慈善活動にも関心を持っているが、半分はそれを疑っている。貧しい人たちを、彼女は、すべてを詐欺師とうそつきと考えて、彼らから訴えを受け入れないのである。彼女は、機知とユーモアの本を買うが、短くて上手に書かれているなら、信仰の本を借りて読む。もし、彼女が、自分の身体と比べて半分ぐらいでも彼女の魂のために注意深かったなら、ローは、フラビアに奇跡が起こると言う。彼女は、顔のにきびがでたぐらいで、部屋に閉じこもってしまうのである。彼女は、非常に神経質に自分の健康を気遣う。彼女は睡眠薬を使って寝る。それにも拘わらず、フラビアは、安息日に仕事を許さないように気を使っている。したがって、日曜日の夜に彼女の衣類を直した年寄りのお手伝いさんを家から追い出したりしているのである。¹¹

このフラビアは、明らかに同情的でない仕方で登場させられているが、我々は自分たちの中にいるフラビアに出会うこともあろう。そして結果として、我々はフラビアの生活全体が救いに必要な気分と実践に反しているとローによって指摘されるのである。

それから、ローによって、聖なる生活が命と願望に欠けた生活であるという主張に対応する、フラタスという登場人物を紹介する。フラタスは、金持ちで、常に不安定で、幻想的な幸福を探している。彼に会うたびに、新しいプロジェクトのために頭を使い、いつも何か新しいものを探している。最初、彼は、素晴らしい服に関心を払い、最も良い仕立屋を探し求めて時間を

¹¹ William Law, p.61 ~ 64

過ごした。しかし、これも究極的には彼の期待を満たさなかった。そして、次に、彼はギャンブルに方向転換した。これは、しばらくの間、彼を大変満足させた。しかし、遊びの運命であるが、彼は、争いごとに巻き込まれ、決闘を申し込まれて、かろうじて死から逃れた。それで、彼は、賭博師たちの間にはもう幸福がないと思った。次に、彼は、町に気晴らしに行き、社交場と踊り場において、婦人についてばかり話していた。けれども、彼は、不運にも強い酒をあびるように飲む習慣が付き、酔っ払うことにふけた。次に、彼は、新しい犬小屋、新しい馬小屋を建てて、狩りをしたが、まもなく無意味な騒ぎと狩りの疲れのため嫌になることを学んだ。そして、彼の地所を再建することに引かれていき、建築について際限なく細部を論じる状態で多くの時間を過ごした。しかし、次の年、彼は石工と大工について不平を言って彼の家を未完成のままにしておいた。フラタスは、学問的な追求に興味を持ちさえしたが、すぐに方向転換をしてハーブなどで暮らすためにまもなくそれらも捨ててしまった。

このような仕方では、ローは、我々に聖なる生活によって導かれないなら生活は空虚になると言うのである。しかし、我々はフラタスの生活描写なしではおよそ空虚を見ることできない。なぜなら、我々は、鏡のようにして我々の生活を反映している彼の生活パターンを見ることが出来るからである。フラタスは確かに誇張されているが、ローは、たしかに私たちの生活様式を示唆しているのである。フラタスが絶えず変化するのに対して、我々は誤った幸福の一つで満足することもある。富を積み上げるか、地位を求めめるかである。しかし、それは、フラタスとて同じくらい愚かであるということになる。

ローは、ただ否定的なキャラクターを描くだけではなく、我々が称賛でき、またそうすべきである人たちについても描写しようとした。なぜなら、彼は、信仰生活が退屈であるより、エキサイティングであり、魅力的で、面白いものだと描写したいからである。一般に罪の生活の方が美德の生活より楽しいと考えるが、物語はその反対である。ローは、驚くほど徳のある人たちを描くことに成功した。

ローは、ミランダというシリアスで合理的なキリスト者として生活する

女性を描くのである。これは、実際のモデルがいたといわれている。彼女は、母親が形式的に生き、飾り立て、遊技場の俗っぽさを上品に語って聞かせて上品になることを強いても、反対の行動によって過去を償う生活をしている。彼女は、神と隣人への義務を分けずに、神のためにすべてを配慮しようとする。彼女は、貧しい人々に彼女の富を分け合おうとするのである。けれども、彼女が、自分が貧しい人の立場に立って、貧しい人がただ娯楽のための金を得ようとするなら、それを与えないようにして、愚かさに陥らないようを進めている。彼女は、自立の方法も知っていくようにする。ローは、彼女の生活がこの世によって効果的だというのではなく、ミランダの生活を志操強固のものとして提供するのである。しかし、ミランダも嫉妬心や傲慢さと戦わなければならないのである。¹²

最後にローは、魅力的な戦いの中にあるアワラニウスという人物を登場させている。彼は、アワニウスという小さい田舎の村で働く司祭である。彼が、彼自身と他の人々のために祈るとき、彼の配慮の下にあるすべての魂は貴重な存在となるのである。彼は、人々を愛するが、彼の民にとってそれが十分であるとは思っていない。そして彼はだれにでも同じ信仰で彼の教区の皆を訪問する。

アワラニウスが最初に司祭になったとき、まだそうではなかった。なぜなら、彼は、愚かに見える非合理的な人々を軽蔑していたからである。そういった感情を引き起こした彼の気分は、ごう慢さを持っていた。しかし、次第に、彼は、祈りによってその心を取り去っていった。今や、人々の側の粗野でしたたかな歪んだ行動は、彼の期待を裏切って彼を不機嫌にするより、むしろ彼に助けを求めて神に祈ることをさせる。ローが進めるのであるが、彼の会話の精神、彼を支えている気分、彼の持っている情熱は、不思議に人々を明るくするのであり、さらに彼の力強い説教は、人々を注目させるのである。それらは、すべて彼が語りかけ神に祈った人たちに対して感じさせる明るさであり、気分であり、情熱であり、力強さである。このような精神が彼の生活全体に浸透していたのである。なぜなら、彼が最初にその小さな村に

¹² William Law, p.76

赴任した時、その毎日は彼のタラントにふさわしくないとって受け入れがたかったのである。教区は、紳士の会話にはふさわしくない普通の人々に満ちていた。彼は家に滞在してホームーとプラウトについて研究した。しかし、神への献身が徐々に彼の心を支配していった。今や彼の日々は、どちらかと言うと自己中心に生きると退屈になり、彼は、多様な良いことのためにアイデアを実行する多くの時を欲している。彼は、神がそこに派遣し、人々を天国に導くことを望むようになったので、あえて孤独を愛するようになったのである。彼は、貧しい人々と一緒に談話するだけでなく、最も貧しい民に出会って彼らに対応している。彼は、今紳士だけでなく、すべての人と共に生きていきたいと願っている。

まとめ

ローのプロジェクトにとって、このような登場人物（キャラクター）は、完全について考えるのにはなくてはならないモデルたちである。なぜなら、完全になることは、私たちが自己欺瞞におちいる誘惑にあうニュアンスに富んだ事態だからである。したがって、モデルに学びつつ実践的に会得しなければならぬのである。つまり、我々は、ただ一般的に愛したり、嫉妬から自由になったりすることはできないのであり、他の人たちから学んで、はじめて神の恵みに生きる技能を身につけることができるからである。なぜなら、完全は、適切にそれを正しく感じるために「人間の生活の全体性」を要求するからである。したがって、ローは、彼の登場人物たちの性格付けを通してその「全体性」を提供しようとしたのである。

それで、我々が完全になることができる自己を持つための技能を学ぶために、ローは、我々の想像力を引き起こすための登場人物を提供するのである。このような登場人物を描くことは、ウェスレーの段階説より具体的であり、さらに人生の旅路にふさわしいものである。現代的な用語を用いれば、それは「成熟」とか「全体性」ということになるであろう。もちろん、このようにローの性格付けを学んできたのは、ウェスレーの「完全」という発想を現代化するためでもあるが、そういうことより、彼が表現しようとしてい

たものを私たちの想像力を刺激し、豊かにして、現代社会においてまたキリスト教信仰が生活世界全体を包む技能として実践的に把握されるためである。キリスト者は、それこそ多様な生き方をするものであるが、人生の旅路を歩む仕方は同じであり、おなじ美德やキャラクターを身に付けていくのである。これは、個人的な旅路であるよりも、教会という神の民の旅路である。はじめに、トニーの 18 世紀以来の世俗化と断片化の問題意識を紹介したが、ウェスレーやウィリアム・ローの信仰の全体性の回復は、さらに生活世界を論じる神学に刺激を与えるであろう。

(青山学院大学教授)